

平成31年度(令和元年度) 山口大学教育学部附属光小学校 学校評価書 (校長 野村 厚志)

1 学校教育目標	
学校教育目標: 知性と共生のひびき合い・関わり合い ○ 学力の充実: 小中一貫カリキュラムの磨き上げ ○ 業務改善: 組織と業務のスマート化 ○ 個が育つ: 健康と自己形成 ○ 環境整備: 小中一貫教育の実質化 ○ 集団が育つ: 公共の精神の涵養 ○ 学校運営協議会と共に: 活動と成果の発信	

2 現状分析(前年度の評価と課題を踏まえて)	
(1) 学力の向上 児童の学力は、概ね良好な状況にあり、「主体的・対話的で深い学び」の具現化が順調に進んでいる。新学習指導要領の完全実施に向けて、教科・領域全体に渡った底上げとバランスのよい学力の向上について、一層の取組の改善が必要である。	(4) 学部・保護者・地域との連携の強化 学部との連携については、学校のニーズと学部のリソースとのマッチングに改善の余地が見られた。附属学校の取組について、年間を通じた学部への定期的な情報提供や日常的な連携について改善が必要である。
(2) 心の教育の推進 児童自身の自己肯定感は高く維持されている状況である。保護者や教職員からの評価との間に差が見られることから、既得の価値観を深まりや広がり、新たな価値観の獲得など、道徳教育全体計画の見直しを含め、取組の改善が必要である。	地域連携については、学校運営協議会の立ち上げが終わり、コミュニティ・スクールとしての歩みが始まった。学校運営・地域連携・地域貢献について、児童の参画を含めた具体的な取組の蓄積が必要である。
(3) 健康・安全と体力の向上 学年が上がる毎に起床や就寝、朝食摂取に課題が見られる。通学が広範囲に渡る本校の実情に即した具体的な提案が必要である。また、SNS・インターネットの利用等についても、家庭と連携した取組が必要である。また、校内での骨折が依然多く、改善が必要である。	(5) 業務改善の推進 昨年度は、時間短縮の面では一定の成果が見られた。本年度は限られた時間の中で可能な限りの業務の質の維持・向上が図れるよう、一つ一つの業務の意味や必要性について見直しを進め、新しい働き方モデルの構築を目指していく必要がある。

3 本年度重点を置いてめざす成果・特色、取り組むべき課題	
○ 主体的・対話的で深い学びを通して、小中9年間を貫く学びのモデルを構築する。(学力)(心の教育)(健康・安全と体力)(学部・保護者・地域連携)(業務改善) ○ 自他を尊重できる集団づくりを通して、児童一人ひとりの心身の成長を図る。(学力)(心の教育)(健康・安全と体力)(学部・保護者・地域連携)(業務改善) ○ 効率的な業務の一層の充実を図り、新しい附属学校の在り方を創造する。(学部・保護者・地域連携)(業務改善)	

4 自己評価						5 学校関係者評価	
評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組(具体的方策)	評価基準	達成度	達成状況の診断・分析	取組状況に関する意見・要望等	評価
学力の向上	思考力・判断力・表現力を確かなものにする学びの推進	<ul style="list-style-type: none"> 主体的・対話的で深い学びについての実践と情報発信 児童に育む資質・能力に特化したカリキュラム開発 児童ごとの特性に応じた指導改善 	児童・保護者アンケート(授業関連)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	4	主体的な授業、対話的な授業、深い学びの授業についてのアンケートの結果、どれも年間を通して、肯定的回答率が90%を超えた。今後も、児童自らが問いをもち、意欲的に活動する授業づくりを目指す。	・教員の研修成果が学力調査結果に表れている。 ・児童の授業への不満には、敏感になるべき。 ・読書の楽しさを教えてほしい。	4
	各学年の課題に応じて、保護者と連携して取り組む学力向上策の開発	<ul style="list-style-type: none"> 各学年の課題に応じた家庭学習方法の実践と検証 児童に育む資質・能力に応じた家庭学習方法の実践と検証 	保護者アンケート(家庭学習・学力)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	1	家庭学習の保護者アンケートでは、肯定的回答率が前期に比べて上昇したものの80%に届かず、また、昨年度を8.5ポイント下回ってしまった。家庭学習状況の改善に向け、取組強化が必要である。	・家庭学習は保護者の協力が不可欠。各家庭の工夫を紹介するとよい。 ・理科や社会、英語等の宿題も必要に感じる。	1.8
心の教育の推進	道徳科を要としたよりよく判断し、実践しようとする心身の育成	<ul style="list-style-type: none"> 道徳科の授業づくりを通じた、児童の変容の見取りと評価 	児童・保護者・教職員アンケート(道徳科)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	4	児童・保護者・教職員のアンケートの結果、どれも肯定的回答率が90%を超えた。今後も、児童が多様な価値観を知り、自分自身の生き方を振り返る授業づくりに取り組んでいく。	・発言しやすい授業の雰囲気营造を大切にすること。 ・児童は道徳性を学校生活全般で身に付けているため、教師は叱る時に特に注意してほしい。	3.7
	集団意識を基盤とし、自治と誇りを基軸としたマナーアップ	<ul style="list-style-type: none"> 登下校中や公共の場での態度の価値付けを通じた、望ましい集団づくり 児童の自治的な工夫・改善を通じた主体的な取組の推進 	児童・保護者・教職員アンケート(規範)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	3	児童・保護者の肯定的回答は90%を超えたが、教職員は86.4%であった。児童は、友達がバス車内等で騒がしいとしながらも、自分はマナーを守れていると回答している者が多い。自分の行動を振り返られるように学校教育全体を通して取り組む必要がある。	・マナーの大切さは繰り返し指導することが大切。子どもの方から挨拶できるようにするとよい。 ・送迎時等、保護者自身もマナーを考える必要がある。	3
健康・安全と体力の向上	自らの生活の課題を意識し、工夫しようとする意欲・態度の育成	<ul style="list-style-type: none"> 本校の実態に即した、早寝・早起き・朝ご飯の啓発、食育指導や保健指導を通じた、健康的な生活習慣や態度の育成 	児童・保護者アンケート(生活)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	1	児童の早寝・早起きについて、保護者の肯定的回答率が80%を下回ったが、昨年度より2.8ポイント上回った。健康的な生活習慣の啓発について、今後は具体例を示しながら取り組むことが有効であると考えられる。	・家庭の協力が重要。啓発を続けるしかない。 ・学校保健委員会で各家庭のアイデアを聞く機会があり、参考になった。	1.8
	安全に楽しく運動を楽しむ資質・能力の向上	<ul style="list-style-type: none"> 運動場面を捉えた具体的な安全指導の充実 体育科の授業や家庭生活での実践を通じた柔軟性の向上 	校内・校外での骨折(前年比) 4(50%減), 3(40%減), 2(30%減), 1(20%減)	4	児童の骨折の件数が昨年度比62.5%減となり、大幅に改善された。体育科や休み時間等の運動場面での安全指導が今後も有効と考える。	・外遊びを堪能できる工夫が、学校・家庭それぞれに必要。できれば教員も一緒に遊んでほしい。	3.8
学部・保護者・地域との連携	学校と学部との連携を密にした教育研究の推進	<ul style="list-style-type: none"> 年間を通じた定期的な情報提供及び教育実践研究サイクルの構築 	教職員アンケート(学部連携)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	4	学部との連携について、教職員の肯定的回答が100%となった。今後も、学校から情報提供を行い、学部から指導・助言を得て、児童の学習環境の向上につながるよう努める。	・附属学校の特色。学部教員や学生との連携推進を期待する。 ・学校と学部の連携が保護者に見えにくい。	3.8
	学校と保護者、保護者と保護者のネットワークづくり	<ul style="list-style-type: none"> 学校webページを活用した各種情報発信の充実 非常変災等、学校の危機管理に関する共通理解と訓練の充実 PTA、おやじの会への参加を通じた保護者同士の絆づくり 	保護者アンケート(PTA等)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	2	学校との連携に関する保護者アンケートでは、非常変災時の対応理解が進み、肯定的回答率が81.6%と、昨年度をわずかに上回った。PTA活動への協力は低下したため、参加者を増やすための方策をPTA執行部と検討していく。	・仕事をもつ保護者が増えているため、PTA活動について、時間帯や場所等工夫する必要がある。 ・引渡し訓練等、PTAの重要性に気付く活動への参加を促したい。	2.3
	附属学校の特性を生かした地域とともにある学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会準備委員会の熟議による、コミュニティ・スクールの推進 児童の参画によるコミュニティ・スクール機能の強化 	4(児童が参画した地域との取組), 3(児童が参画した学校運営協議会との活動), 2(学校運営協議会の提案による新たな取組), 1(学校運営協議会での学校運営に関する熟議)	2	学校運営協議会での熟議、教職員での熟議を踏まえ、次年度の学校経営ビジョンに反映させた。この具現化に向け、今後、具体的な取組を行う必要がある。	・子どもたちのために、地域や保護者を巻き込んだ活動が行えるとよい。 ・学校運営協議会での話を、教員、保護者、地域の人等、広く伝えてほしい。	2
業務改善	業務の見直しと効率化を通じた働き方の改善	<ul style="list-style-type: none"> 教職員個々の超過勤務時間減への意識付け 小中の同僚性の向上、組織内ネットワークの強化による業務の効率化 	月超過限度42時間に対する平均超過時間 4(10時間減), 3(5時間減), 2(2時間減), 1(0時間減)	1	42時間に対する平均超過時間は、0.1時間増となった。達成度は1であるが、昨年度は、36.6時間増であったため、大幅に改善された。	・職員の業務が本当に減っているのか疑問。大胆な業務改善が必要。 ・外注できるものは進め、児童との時間は減らさないでほしい。	1.8

6 学校評価の総括(取組の成果・次年度への改善策)	
(学力の向上)学力については概ね良好であるが、今年度も理科が他教科と比較して課題が見られた。定着が図れるよう、授業での振り返りの強化が必要である。家庭学習は改善が必要である。家庭の協力を得るため、家庭学習はゲーム前に行う等、家庭学習の内容だけでなく、環境改善も含めて提示していくことを検討する。 (心の教育の推進)心の教育に関するアンケート結果は、概ね良好であるが、保護者アンケートの挨拶の項目では、肯定的回答率が80%を下回った。児童自身は挨拶ができていないと答えているため、いつ、どこで、誰に対して挨拶を行うとよいか、教師が具体的な場面を示すとともに、自分から挨拶をするよう促していく。 (健康・安全と体力の向上)保健室の来室件数は昨年度を下回り、骨折件数も大幅に減少した。家庭での生活に関しては、朝食の摂取率は高い結果となったが、早寝早起き、家庭での運動の機会について課題が残った。家庭学習についても啓発を強化していく必要がある。 (学部・保護者・地域との連携)学部との連携では、本校主催の教員研修「授業について語り合う会」において、本年度初めて大学教授を指導者とし、連携を強めることができた。保護者のPTA活動の参加については、今年度も課題が見られた。保護者が仕事を欠勤することが難しかったり、校区が広いために来校が難しかったりという条件が関係していることが考えられる。今後のPTA活動の在り方について、PTA執行部と共に協議していく。 (業務改善)働き方改革として、業務時間削減は目標には及ばなかったものの、前年度に比べて大幅に改善した。今後、附属学園の四つの使命である、普通教育、教育実習、教育実践研究、地域貢献に基づき、費用対効果を吟味し、精選を進めていく。	